

## 県立高等学校活性化にかかる生徒による実践発表

人口減少の進行、グローバル化や情報化の進展、産業構造や雇用環境の変化など、教育を取り巻く社会状況は大きく変化し、中学校卒業生数の減少が見込まれる中、高等学校が活力ある教育活動を行い、生徒の社会性を育む場であり続けられるよう、地域の状況や学校の果たす役割、学校の特色等に配慮しつつ、県立高校のあり方や活性化について総合的に考えていく必要があります。

このため、平成29年3月に「県立高等学校活性化計画」を策定し、新しい時代に求められる学びへの変革、社会とつながり貢献する力の育成、地域で学び地域を活かす教育の推進などの取組を進めています。

専門学科の中には、郷土三重に根ざす農業や工業の担い手として必要な基礎的な知識・技術の学習に留まらず、実際の取引や消費などの場面で不可欠となっている基準や仕組みを体感することを通じ、課題を踏まえチャレンジすることやグローバルな視点で将来を見据えることを実践的に学び始めている学校があります。

地域の学校では、地域をフィールドにして産業や暮らしの実情と課題を様々な立場の大人から聞き、自分で確認して、その課題を解決する方策について考え、議論を重ねる、地域課題解決型のキャリア教育に取り組んでいます。その中で、多様な価値観、様々なもの見方に触れ、地域と自分の将来を考えています。

これらのことに取り組んでいる次の2校の生徒による実践発表を行います。

### ① 明野高等学校 「JGAP茶（荒茶、生葉）認証取得から広がる地域貢献」

生徒が主体となって、GAPの認証取得への挑戦を通じ、新たな時代の農業に求められる世界標準を意識し、生産工程や農場環境の改善、地域に取組を発信することなどに取り組んでいます。

これらのことにより、自ら課題を解決する力や地域を元気にしようとする思いや、農業という国の基本となる産業を学ぶことへの誇りを高めています。

現在、アジアGAPの認証取得にも取り組んでおり、東京オリンピック・パラリンピックで使用される質の高い商品の製造にもチャレンジしたいと思っています。

### ② 鳥羽高等学校 「とばっこくらぶのあゆみ～これまでのとばっこ、これからのとばっこ～」

総合学科で行っている観光ビジネス系列の学習を活かし、地域を学びのフィールドに、地域の自然・文化・人の魅力を「知る」ことを原点として、「考える」、「発信する」学習に取り組んでいます。

このことを通じ、地域が抱える課題に向き合い、その解決策を地域の様々な大人の協力を得ながら主体的に考え、地域内外の人に伝える活動を通じ、自分たちが鳥羽を元気にしているという自己有用感を高め、自らの成長や自信につなげています。

「観光甲子園」にも挑戦を続け、今年度は「高校生地域創造サミット」を鳥羽市で開催することから、県内外から参加する高校生に鳥羽の魅力を伝えることにしています。

# JGAP茶（荒茶、生葉）認証取得から広がる地域貢献



三重県立明野高等学校 食品科学科

- 3年 平松 恵莉香 西脇 舞 山本 佳奈  
 2年 重松 想葉 岡村 光樹 高部 敦子  
 世古口 聖 福井 陽菜 須賀 夕結南  
 中森 絢子 橋爪 蘭 奥野 涼華

## 〇はじめに

私たち食品科学科の12名は、昨年の7月24日に開催されました「三重県GAP推進大会」を受けて、本校農場の栽培品目、「茶」でGAP認証取得を目指すことを決意しました。始まりは先生から「茶でGAP認証取得全国の農業高校で1番を目指さないか？」と誘われたからです。そして自発的に集まったのがこの12名です。GAPという言葉の意味も知らなかった私たちは、放課後、遅くまで残って勉強し、少しずつ帳票を作ったり、作業現場の整理・整頓を行ったりして審査に向け努力してきました。

## 〇審査・認証までの歩み

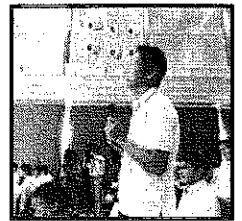
平成29年

### ・7月24日 「三重県GAP推進大会」参加

明野高校からは農業学科の代表として、生産科学科3年の山川 陸先輩が参加し、三重県知事と小泉議員から激励を受けました。

### ・9月1日～ GAPチーム発足

茶チーム・米チームに分かれ学習を開始しました。これは、茶チームの計画です。



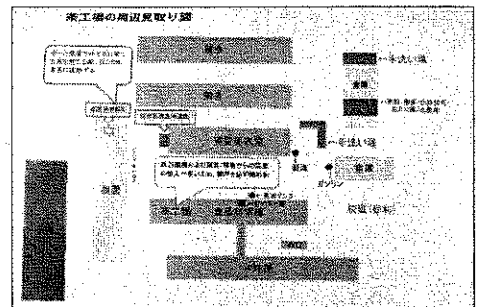
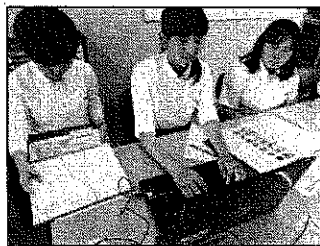
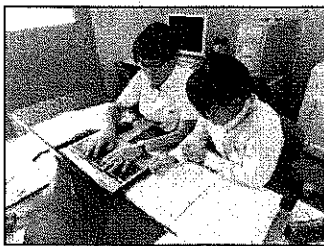
①GAP(JGAP)について知る	GAPの必要性、意義、認証取得に向けての道筋を確認する。
②必要書類の確認と作成	テキスト(茶編)をもとに確認し、明野高校に当てはまるように書類を作成する。
③現状把握・改善点の洗い出し	圃場、作業場の確認 足りないものや改善しなければならないものを確認し、必要であれば購入する。張り紙、立て看板を作成する。
④認証に向けて	JGAP管理点と適合基準をクリアするために内容を理解するとともに、想定される質問に答えられるようにする。模擬審査を受ける。

### ・9月13日・14日 青森県 五所川原農林高校 GLOBAL GAP 公開審査視察

三重県から数人の先生が参加され、そのときの報告を聞かせてもらいました。同じ高校生がこのようなすごい取り組みをしていることに驚くと共に、審査に向け頑張ろうという気持ちが高まりました。

### ・10月～12月 GAP書類(帳票)制作

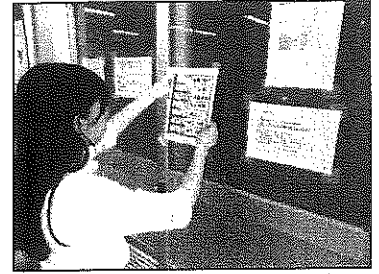
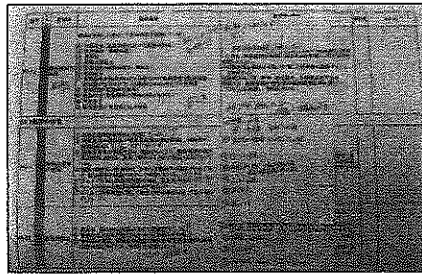
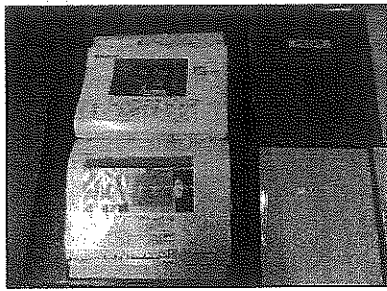
たくさんある帳票や日誌等をGAPの内容に合わせて作成しました。どこにもないものを1から作らなければならないものもあり、一番苦勞した点です。



平成30年

### ・1月～2月 審査に向けての学習活動

120項目ある管理点について適合基準を満たすように書類を整理し、質問に対する回答例を作成しました。また、作業現場の整理整頓・清掃を行うと共に、ルールなどの張り紙や必要な物品を設置しました。



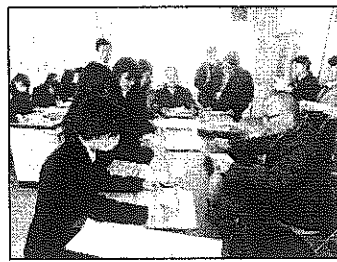
・ 2月2日 コンサルタント

三重県中央農業改良普及センターの野村さんと鈴木さんに来ていただき現場と帳票などを見て、改善点について指導していただきました。プロの方の指摘は大変鋭いものだと実感しました。



・ 2月20日 模擬審査

一般社団法人 日本能率協会 審査員 橋本 省三様に来ていただき模擬審査をしていただきました。模擬審査といえ、本職の審査官の質問にとっても緊張しました。このとき指摘のあった項目について改善を行いました。



・ 3月9日 JGAP 公開審査

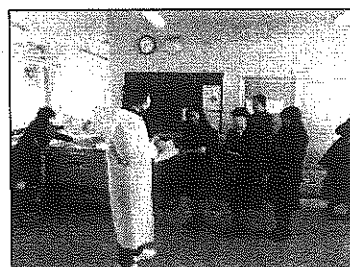
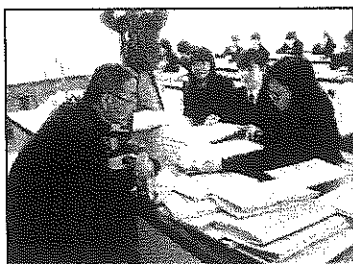
審査・認証機関

インターテック・サーティフィケーション(株) 本社：ロンドン 国内事務所：東京、大阪

審査員 西嶋 政和 様

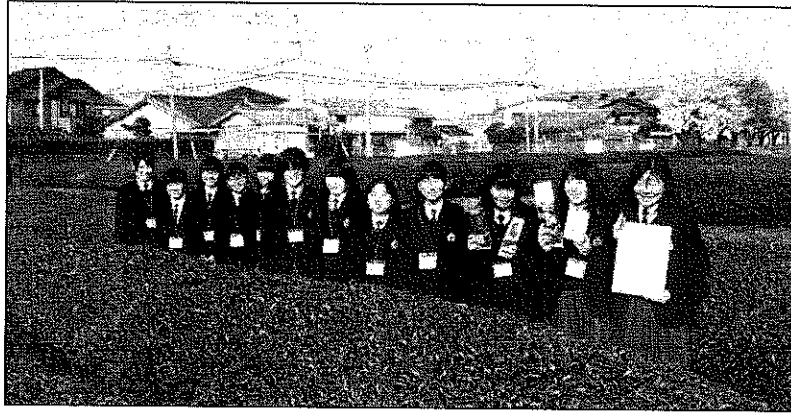
認証品目 緑茶(荒茶・生葉)、紅茶(荒茶・生葉)

たくさんの農業関係者の方が見学に来られ、緊張する中で書類審査5時間、現地審査2時間、質問項目に一つ一つ答えました。何度も練習した甲斐もあって、ほとんど先生の手助けもなく自力で答えることができました



・ 3月13日 是正処置要求書に改善内容を記入し審査機関に送りました

## ・ 3月20日 JGAP 認証書が届きました



## 認証書



3月20日に JGAP が認証され、認証登録証明書が発行されました。残念ながら、全国1番にはなれませんでした(全国2番)、東海ではもちろん1番でした。やっと努力が報われたという感動でいっぱいになりました。

### ○その後の経過(～6月)

#### ・ 3月28日 認証取得報告会

たくさんの新聞社の取材を受け、私たちの取り組みが大きく報道され、多くの方に知ってもらえるいい機会になりました。

#### ・ 5月1日～2日 新茶の摘採

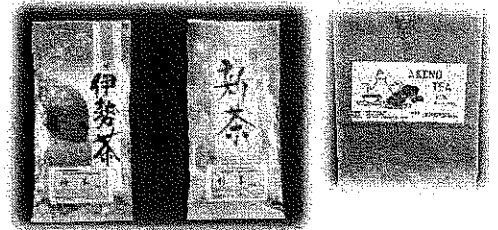
GAPの手順に則って、茶を刈りとり、新茶、紅茶を作りました。今までになく衛生面や異物混入について意識して実習を行いました。

#### ・ 5月17日 三重TVの取材

初めてのTV取材は大変緊張しましたが、明野高校の内容を多くの人に知ってもらえると思うとインタビューに熱が入りました。

#### ・ 6月14日 新茶・紅茶販売

毎年恒例のイチゴジャム販売日に合わせ茶の販売したところ、朝早くから300人近い方が並ばれました。茶娘の衣装を着て販売したため、反響も大きくPRは完璧だったと思います。



### ○この取り組みを終えて

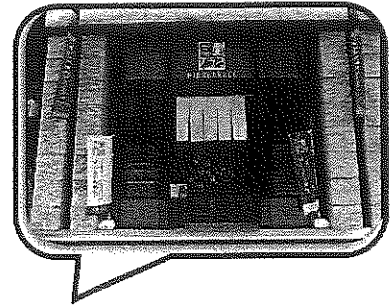
昨年9月からの半年あまりに様々なことを経験し、自分たちも変化し成長したと思います。たくさんの苦労や努力が実を結び、自分たちの学習に自信を持つことができました。また、何事も主体的に活動することは大変で困難なことも多いですが、達成したときの感動は大きいこともわかりました。

私たちは家が農家でもなく、将来就農を考えているわけでもありませんが、高校生のような若い世代が農業について考え、将来の日本の農業を創造することは、地域社会にとってもプラスになることだと思います。現に高校生が GAP 認証を取得することで、地域の方から大きな関心を寄せられました。「高校生が・・・」「しかも女の子達が・・・」という声が聞こえてきそうですが、私たちのような農業をあまり知らない素人でも認証を取得できた。しかも、半年あまりの期間に。このことは認証を取ろうとしている農家の方を元気づけたのではと思います。また、他の学科の生徒達にも良い刺激になったと思います。生産科学科の作物部門での グローバル GAP 取得 や畜産部門の GAP チャレンジシステム への取り組みに好影響をもたらしました。

自分たちの使命は地域を元気に、学校と地域共に活性化することにあると思います。農業という国の基本となる産業を学ぶことに誇りを持ってこれからも歩んでいきたいと思っています。

## ○今後の目標

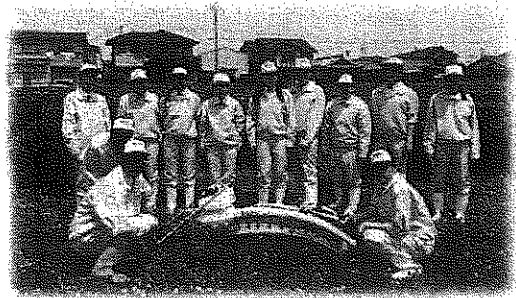
自分たちの力や可能性を信じて、失敗を恐れず次のようなことにチャレンジしたいと思います。



- ①東京オリンピック・パラリンピックの選手村で使っていただけるような質の高い商品かつ「ストーリーのある食材・食品」を製造したい
- ②三重県の高校生が頑張っていることを全国に知らせたい・・三重テラスで販売できれば最高!
- ③「伊勢茶」について学び、栽培も行っている高校生が作る「煎茶」「紅茶」を三重県農林水産部フードイノベーション課が統括する「三重ブランド」に認定していただきたい
- ④福島県との交流を深め、東北を応援するような活動をしたい。  
8月28日に明野高校に福島県の農業高校生が12名来ていただきます
- ⑤4月より進めているローソンとの商品共同開発を成功させたい。  
明野高校らしさを出すために「紅茶」を使ったお菓子ができないか検討中
- ⑥今年度内にJGAPをAsiaGAPにバージョンアップする  
新しく仲間に入った1年生4人と2年生9人でチャレンジします
- ⑦認証取得に向けて得た知識や技術はオープンにし、地域の農家のGAP認証取得に貢献したい  
帳票などのデータはすでに農林水産部に送りました

## ⑧「HACCP」の理論について学習したい

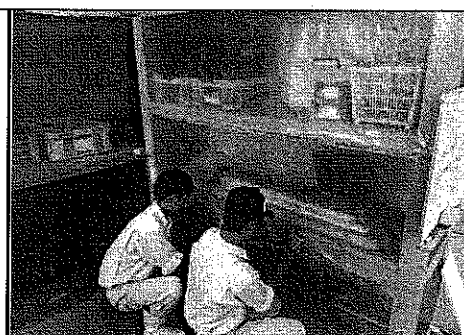
私たちは農業も学びますが、食品科学科なので食品の製造(加工)についても学びます。イチゴジャムを代表とするジャム類や、味噌やあんの缶詰、パンやクッキーなどの焼き菓子を製造し、地域のバザーで販売してきました。イベントでの販売では売る前から大勢の行列ができ、明野の商品は人気があるのだと感じていました。しかし実習などの製造においては作業を言われたまま、あまり考えず行動していました。GAP認証を取得してからは、安心・安全な食品を作るためには細かな点に注意し作業しなければならないと思うようになりました。高校では取得が難しいとされる「HACCP」の理論について学習していきたいと思います。



## <学校内での波及効果>

### 生徒の変容

- ・実習において食品の安心安全について意識して行動できる生徒が増えたと実感しています。異物混入などをなくすために細かな点に注意し作業するようになりました。
- ・苦勞したことが報われたことで、自分たちの勉強方法が正しかったという大きな自信となり、その後の学習活動の主体的な取り組みに繋がっています。その一つとして「ローソン」より誘いがあつた商品開発の事業を前向きな気持ちで4月より取り組んでいます。
- ・今まで得た知識はオープンにし、地域に還元することで地域の農家の GAP 取得に貢献したいと思うようになりました。
- ・JGAP 認証所得後、新聞やテレビで報道されたことと、関係機関からの視察があることは生徒達の自信につながっています。
- ・他学科の生徒達にも良い刺激になったと思います。生産科学科の作物部門でのグローバル GAP 取得や畜産部門の GAP チャレンジシステムへの取り組みに好影響をもたらしました。



- ・農業学科だけでなく家庭学科の生活教養科において、学校の制服改定をしようとする動きが起き、プロジェクトチームが発足しました。「三重県で一番素敵な制服作り」の企業とのコラボが今年度始まりました。



### 教員の変容

- ・JGAP チームをサポートする体制がとれ、生徒と共に一つの目標に向かって学びを深めることができました。
- ・新学習指導要領の発表を受けて、科目「農業と環境」の年指導計画に GAP の指導内容を各科とも横並びで導入することができました。
- ・教員間で GAP に関する情報や帳票の共有ができ、互いの認証取得を助け合うことができました。



### <地域への波及効果>

- ・模擬審査、本審査ともに農業関係者（地元農家・JA・農業大学校など）がたくさん見学に来られ、高校生の取り組みに賞賛の言葉をいただきました。
- ・認証取得後もいくつかの視察・見学がありました。今後もその予定が続きます。  
岐阜県の農業高校（5月）、東海農政局（6月）、農業クラブ東海幹部講習会（8月9日）  
福島県の農業高校（8月28日）
- ・作物部門の生徒が明和町の授産施設と連携し、GAP認証に関わってコンサルタントを行う予定です。

u

### <最後に>

明野高校における年間80回以上の地域連携は、地域からの要望があつての取り組みであり、教職員と子どもたちが一緒になって明野高校と地域を元気にしてきました。とりわけ、昨年度末に認証したJGAPの取り組みは、元気で主体性をもって取り組む子供達だけのものではなく、今後の地域の農家や農業関連の事業者とのつながりを強くするためのものでもあります。将来的に、GAPの取り組みを農家での認証取得の活性化という方向に高めていくことがなによりも重要であり、それこそが、地域における農業高校の役割であると思います。

### <資料>

#### \*GAPについて

食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証であり、農林水産省が導入を推奨する農業生産工程管理手法の1つです。第三者機関の審査により、正しく導入されていることが確認された農場には、認証が与えられます。

#### \*その他

明野高等学校では、農場に40aの茶畑があり、緑茶用品種「やぶきた」を主として栽培しています。全国の高等学校のJGAP、アジアGAP、グローバルGAPの取得は12校（3月末の時点 農林水産省調べ）で、茶では全国2番、三重県の高等学校では初めてとなります。



# とばっこくらのあゆみ ～これまでのとばっこ、これからのとばっこ～

三重県立鳥羽高等学校 地域研究サークルとばっこくらぶ

3年 西川綾乃、大竹真弥 2年 藪木真菜

1年 野村瑠菜、勢力菜海、勢力見海、鈴木愛海、山川大輔

## 1. はじめに

### (1) 鳥羽高校の学び

- ・鳥羽市にある唯一の県立高校、南勢地域唯一の総合学科高校
- ・全校生徒200名足らずの小規模高校
- ・「地域に学び、地域から学ぶ」
- ・1年生：全員共通の基礎固めの授業、2年生・3年生：「観光ビジネス系列」「総合福祉系列」「スポーツ健康系列」「文理進学系列」の4系列を選択
- ・観光ビジネス系列：資格取得、インターンシップ（2年生・夏休み5日間）、社会体験実習（デュアルシステム、3年生・毎週金曜日）



## 2. とばっこくらのあゆみ

### (1) とばっこくらぶが大切にしている3つのこと

- ・「知る」「考える」「発信する」
- ・とばっこくらの原点＝「知りたい」

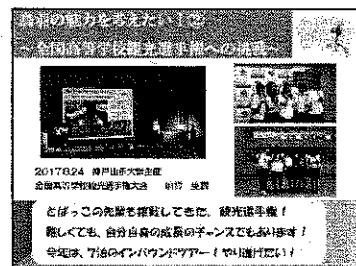
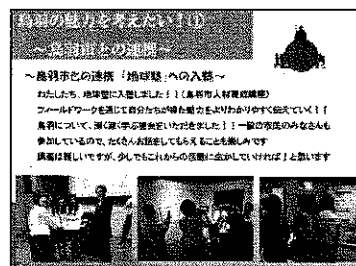
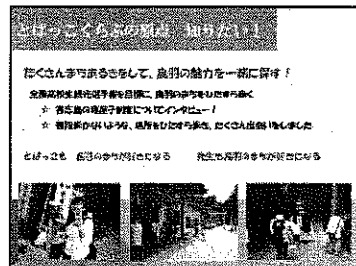
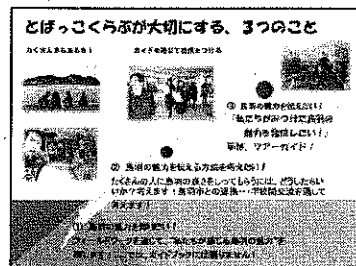
フィールドワーク、インタビュー、地域講座への参加を通して、鳥羽の自然・文化・人の魅力を知ります。鳥羽のことを知ることで、鳥羽のまちが好きになります。

- ・鳥羽の魅力「考えたい」①＝鳥羽市との連携

2016年から鳥羽市教育委員会の地域人材育成講座「地球塾」へ入塾しています。地球塾では、鳥羽についての講義やフィールドワークを通して鳥羽について学び、考えます。講義は難しいけれど、一般市民の皆さんとともに学び、交流もできます。何より鳥羽について知ることは、私たちの活動の目標である「ツアーガイド」の大事なヒントにつながります。

- ・鳥羽の魅力「考えたい」②＝全国高等学校観光選手権への挑戦

神戸山手大学主催の全国高等学校観光選手権大会（通称：観光甲子園）に2015年から毎年エントリーしています。これまで3回挑戦して、うち2回は予選を突破して本





選大会（全国大会）に出場しました。2015年は本選大会で優秀賞を受賞しました。2016年は残念ながら予選突破できませんでしたが、2017年は本選大会に出場し銅賞を受賞しました。今年「離島の生活課題を解消する」をテーマに7泊のインバウンドツアーを企画して、エントリーしました。地球塾で学んだこと、フィールドワークやインタビューでわかったこと、考えたことをもとにツアーの企画を考えました。企画ができあがった時の「喜び」「達成感」「自信」は、自分自身の成長につながり、新たな活動へチャレンジする意欲がわきます。

(2) 観光教育についてのイベントへの参加 (2017年)

・全国高等学校観光教育研究大会への参加

昨年8月に伊勢市で開催された全国高等学校観光教育研究大会に参加させていただきました。観光教育に取り組む全国の先生方の前で、とばっこくらぶの活動について発表したり、大会運営スタッフとして先生方のお手伝いをしました。また、オプションツアーとして「鳥羽のまちガイドツアー」を企画し、参加した先生方に鳥羽のまちあるきとガイドを行いました。

・観高サミットへの参加

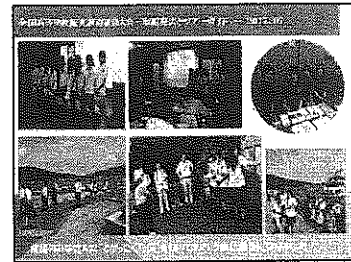
昨年12月に四日市大学を会場に開催された観高サミットに参加しました。観高サミットは全国の観光を学ぶ高校生の交流大会で、各校からの活動報告の発表と観光をテーマにしたワークショップが行われます。私たちと同じように、観光を学ぶ全国の高校生徒との交流はとても刺激になり、様々な情報交換を行うことができ、次のチャレンジへの意欲がわきました。

(3) 県外の高校との交流

・宮城県松島高等学校

松島高校は、観光科2年生の研修旅行で毎年鳥羽を訪問し、交流を行っています。2017年は58名の松島高生を鳥羽駅から鳥羽水族館にエスコートし、水族館内のツアーガイドを行いました。どんなガイドをすれば松島高生に楽しんで、鳥羽を好きになってもらえるかを考えて、クイズやおみやげを考え、ガイド内容を企画しました。今年も来年1月に約50名が鳥羽を訪問するので、さらに楽しんでもらえるガイドや交流を企画したいと考えています。

・岐阜県立益田清風高等学校



海のない下呂と雪があまり降らない鳥羽。そこで、「海と雪」のコラボレーションをテーマに毎年2回の交流をしています。夏には益田清風高生に鳥羽を訪問してもらって「海」を体験してもらい、冬に私たちが「雪」を体験しに下呂を訪問します。お互い知らないものを通じての交流は、とても興味深く、それぞれの地元でのガイドやおもてなしを通じて、とばっこクラブの活動をよりよくするためのヒントにつながっています。今年も8月に鳥羽に来てもらう予定です。

・愛知県立福江高等学校

福江高校は、伊勢湾を挟んで鳥羽の向こう側、田原市にある高校です。今年から新たに交流がスタートしました。8月に福江高校のある田原市を私たちが訪問して交流し、10月には福江高校が鳥羽を遠足で訪れ、私たちがツアーガイドをする予定です。

(4) 鳥羽市の応援を私たちの力に

- ・観光甲子園での鳥羽の魅力発信や地球塾との連携など、これまでの活動が認められ、昨年鳥羽市から感謝状をいただきました。活動をがんばってきたことが多くの方に認められて、とてもうれしかったです。また、鳥羽市内をフィールドワークをしていると、地元の方から「鳥羽高生がんばるとるな」「応援しとるでがんばってな」などと声をかけてもらうことも多くなりました。とばっこクラブの活動をやってよかった、もっとがんばろうという気持ちになり、新たな意欲がわいてきます。

3. さいごに

(1) これまでのとばっこ、これからのとばっこ

- ・これまでは、先生から「これやってみたら？」と言われて活動することがほとんどでした。その活動の中で、たくさんの鳥羽の魅力に出会い、どうすればその魅力が伝わるかを考えられる、伝えられる力がついてきたと思います。
- ・これからは、とばっこクラブ全員で、アイデアを出しながら、鳥羽のまちを盛り上げていく活動をしていきたいと考えています。まちのみなさんに愛される「ツアーガイド」になることが目標です。

(2) 私たちの思い

- ・私は1年生です。中学生の時に進路を考えていた時に、先生が「鳥羽高校のとばっこクラブ」の活動について教えてくれました。先輩の活動する様子を聞いて「私も鳥羽高校でがんばりたい!」と思い、鳥羽高校に入学しました。私は鳥羽の相差出身です。とばっこクラブの活動を通じて鳥羽の魅力をこれからたくさん発信していきたいと思っています。将来「観光」に関する仕事を考えているので、とばっこクラブの活動で、地域や観光について学んでいきたいです。
- ・これまでの一人ひとりの経験を自信につなげていきたいです。また、とばっこクラブの活動をこれからも続けて、「鳥羽の魅力」に自分たちから出会いに行くことを大切にしていきたいです。

# 観光教育を核とした地域連携の推進による総合学科高校の魅力化・活性化

三重県立鳥羽高等学校

校長 清水 豊

## 1 主題設定の理由

本校は国際観光都市、鳥羽市にある唯一の県立高校で、今年で創立106年目を迎える。学科や課程の改編などの変遷を経て、平成17年に三重県で8番目、南勢地域で唯一の総合学科高校として新たに改編された。

本校では、約6割の生徒が就職の進路希望を持ち、総合学科の多様な教育活動や課外活動等を通じて成長している。一方で、基礎学力の定着、学習意欲や規範意識の涵養に課題もある。十分な自尊感情を持たず、仲間との良好な関係づくりが苦手な生徒も見られる。

地元の公立高校として地域から信頼される学校づくりをすすめるために、本校では地域の特性である「観光」を核とした地域連携の推進による学校の魅力化・活性化に取り組んでいる。本稿ではこれまでの本校の取組を報告し、成果と課題について検証したい。

## 2 研究のねらい

我が国においては近年「観光立国」が国策として推進されている。高校教育においても観光教育は今後の日本の産業・経済を牽引する人材を育成する重要な分野と位置付けられ、次期学習指導要領では商業教育における重要なテーマとして取り扱われると聞く。

本校では、「観光教育」を狭義のビジネスとしての観光や人材育成のための観光と捉えるのではなく、「観光教育を核とした」地域連携や地域学習を念頭に置いている。観光そのものを学ぶのではなく、観光を切り口として、生徒が地域に関心を持ち、地域の課題について考え、地域に貢献していくことをめざす。地域の方から話を聞いたり、地域に出てフィールドワークを行い、調べたこと考えたことをまとめ、発表・発信することで、生徒の総合的な学力を向上させ、本校の課題である生徒の自信や自尊感情を育むことをめざす。

## 3 本校の取り組み

(1)観光教育・地域連携を意識した教科等での学習活動

①「産業社会と人間」における地域学習

平成26年度より地域学習の意識づけを行うために新入生研修会として鳥羽市の離島である答志島でのフィールドワークを実施している。当初2年間は地域のボランティアガイドの協力を得て島内の散策を行う形だったが、28年度以降は島内の各ポイントをグループで回り、写真を撮影したり、指示された問いに答えるというオリエンテーリング形式で行っている。昼食は答志島の特産であるわかめ、たこ、ちりめんじゃこなどを使った調理体験である。



九鬼水軍ゆかりの史跡や海女小屋等を巡り、島の食文化に触れて、離島の文化や歴史を学ぶことは、新入生にとって新鮮な体験であり、事後レポートでも肯定的な意見が多い。また、入学間もない中でクラスの親睦を深めるよい機会にもなっている。高校生活のはじまりにこのような体験活動を実施することはその後の地域学習への興味・関心や意欲を高めることにつながっている。

### ②観光ビジネス系列2学年「地域研究」

観光ビジネス系列の学校設定科目「地域研究」では、「地元鳥羽市の歴史文化や産業を学ぶ」ことから学習をはじめ、地域の抱える様々な課題について考えることをめざし、体験的な学習活動を行っている。基本的な授業スタイルは《事前学習→専門家の講義・フィールドワーク→振り返り》の形である。

フィールドワーク先としては「海の博物館」「鳥羽水族館」「大庄屋かどや」「鳥羽城址」等、鳥羽市の地域資源を活用し、それぞれの訪問先で地域の方や専門家に講義をしていただき、振り返りでレポートにまとめる。

28年度はさらに伊勢志摩サミットの「国際メディアセンター」を見学し

国際メディアセンターでの講義



て外務省の担当者から講義を受けたり、サミット会場の志摩観光ホテルで実際に会議が行われた会場や庭園を見学し、担当職員からサミットにおける「おもてなし」について話しを聞くなど、その時々「旬」の内容を授業に取り入れている。



サミット会場や庭園の見学

一連の活動を通して、生徒だけでなく、教員自身も地域学習から気づきを多く得ることができるとともに、地域のさまざまな分野で活躍されている人との関わりの中から教材や講師人材のリソースを得ることができ、年々授業内容の幅が広がっている。

### ③文理進学系列2学年「鳥羽学」

文理進学系列の学校設定科目「鳥羽学」では、様々な視点から鳥羽について学ぶことをめざす。授業は国語・社会・理科・英語の4教科の教員が担当し、それぞれの教科に関連した視点から地域学習にアプローチしている。例えば国語では神島を舞台とした三島由紀夫の『潮騒』について学習し、実際に神島を訪れて小説を実感するフィールドワークを行う。社会では「海の博物館」「海女文化資料館」を訪れて海女文化について学習したり、「鳥羽城址」を訪れて鳥羽の歴史や文化を学ぶ。理科では鳥羽の最も重要な資源である「海」の環境を学び、港で採取した海水のプランクトンを調査する。英語では、鳥羽の代表的な観光・文化施設や史跡などを外国人観光客に英語で説明できるような学習に取り組む。授業を複数教科の教員で担当することで、教科横断型のカリキュラムマネジメントの実践の場となっている。

### ④デュアルシステム

今年度より観光ビジネス系列と総合福祉系列の3年生でデュアルシステムを実施している。デュアルシステムとは、年間を通して企業等で職業体験を行い、それを授業の単位として認定するシステムで、本校では毎週金曜日に鳥羽市内の観光関連企業や福祉施設等で実習を行っている。多くの企業や施設の協力のもと、鳥羽市の基幹産業である観光現場での実習を通じ、これまで以上に地域と学校が連携して生徒を育てる環境や意識の向上が期待できる。



市内観光ホテルでの実習風景

## (2)観光教育・地域連携を意識した生徒の活動

### ①地域研究サークル「とばっこくらぶ」の活動

平成27年度に地域研究サークル「とばっこくらぶ」が発足した。とばっこくらぶではフィールドワークを中心にした地域学習に取り組んでいるが、さらに地域の魅力を発信する活動にも積極的に取り組んでいる。特に活動の中心となっているのは「観光ガイド」の活動である。27年度に三重県で開催された「全国産業教育フェア三重大会」で「とばっこバスツアー」という鳥羽のまち歩きツアーを企画・開催し、県内外の50人以上の参加者に鳥羽の魅力を伝えた。これを皮切りに28年度は鳥羽市教委の人材育成講座「地球塾」と連動して実際の観光客に観光ガイドを実施し、29年度に伊勢で開催された「全国高等学校観光教育研究大会」でも、全国から参加した観光教育に関わる教員にガイドツアーを実施した。また後述の県外高校との交流活動でもガイドを行っている。

### ②「観光甲子園」への挑戦

「観光甲子園（正式名称：全国高等学校観光選手権大会）」は平成21年に始まった高校生による「地域観光プラン」を競い合う大会で、企画の書類審査を通過した上位校が決勝大会でプレゼンテーションを行う。

本校は25年度より観光ビジネス系列3年生の選択科目「総合実践」の授業でこの大会に向けた観光プランづくりに取り組みはじめたが、予選突破には至らなかった。27年度にカリキュラムの改編により総合実践の授業がなくなったことと、年間を通じた持続的な活動に発展させることをめざし、「とばっこくらぶ」の活動の中で取り組んでいくこととした。その結果、「答志島の寝屋子制度」をテーマとした観光プランで見事予選を突破し決勝大会でも優秀賞を受賞した。29年度も「相差と海女」をテーマとした観光プランで2度目の予選突破を果たし、決勝大会で銅賞を受賞した。



観光甲子園決勝大会でプレゼン

大会で賞を取ることが目的ではないが、予選突破をめざして地域学習やフィールドワークを重ね、チャレンジし続けることで、積み上げてきた知識やノウハウが後輩に伝えられ、新たな取り組みの礎となる。また、甲子園への出場により、鳥羽市における本校の活動の認知度が向上し、連携や支援の輪が広がっていくなど、

観光甲子園への取組は本校の観光教育、地域学習の広告塔的な意味合いを持つようになってきている。全国大会への出場を通じて地域から注目され、評価されることで、発表する生徒だけでなく、他の生徒にとっても鳥羽高の生徒として「やればできる」という自信と自尊感情の向上につながっている。

### ③観光教育を推進する県外高校との交流活動

本校は平成 25 年より全国高等学校観光教育研究協議会に加盟している。それを機に観光教育に取り組んでいる県外の高校との交流が始まった。

#### ①岐阜県立益田清風高校との交流

益田清風高校は下呂市にあり、本校とは対照的に山間地に位置することから、27 年度より「海と山との交流」として相互に生徒有志が訪問して交流活動を行っている。8 月に益田清風の生徒が鳥羽に、2 月に鳥羽の生徒が下呂を訪れ、アクティビティ体験を通じて交流する。また、この交流をきっかけに部活動の交流も始まり、本校ソフトテニス部が下呂市で合宿をし、益田清風のソフトテニス部と合同練習を行っている。

#### ②宮城県松島高校との交流

松島高校は宮城県松島町にあり、平成 26 年度より「観光科」が設置されている。海の観光地に位置する学校同士として 27 年度より交流が始まった。観光科の修学旅行（研修旅行）の一環として京都、伊勢志摩を訪問する行程の中の一日を本校との交流に充てている。交流内容はとぼっこらぶのガイドによる鳥羽のまち歩きツアーと鳥羽高校での交流行事である。交流行事ではグループに分かれてお互いの活動内容を紹介したり、「地元の良さを PR するには」等のテーマでディスカッションするなど、研修旅行の一環として観光を学ぶ者同士の学びの場となるような交流をめざしている。

松島高校生徒への観光ガイド



#### ③愛知県立福江高校との交流

福江高校は愛知県田原市にあり、平成 30 年度より観光ビジネスコースが設置される。伊勢湾の対岸に位置しフェリーでの往来が可能であるため、観光ビジネス系列を展開する本校との交流を希望している。3 校目の交流先として、具体的な準備を始める予定である。

## 4 成果と課題

### 【成果①】子どもの成長

地域に関わる様々な学習や地域の大人とのかかわりを通じて、地域の方から評価されたり、褒められたりする場面が確実に増えた。学力的に課題を抱える生徒が多いことに変わりはないが、こうした肯定的評価により自信を持ち、自尊感情が高まる。それと呼応するように、観光教育や地域連携の再構築に取り組んだ平成 25 年度以降、生徒指導上の問題行動は目に見えて減少し、学校は落ち着きを取り戻している。

### 【成果②】地域からの評価

生徒が地域の中に出て行く場面が増えたことにより、鳥羽高生が地域の方たちの目に触れる機会が多くなり、本校の教育活動への関心が高まってきた。これまでの「荒れた鳥羽高」のイメージが徐々に払拭され、「がんばっている鳥羽高」に変わりつつある。行政や産業界から一定の期待を寄せられるようになり、様々な場面で連携や支援が得られやすくなってきている。

### 【成果③】教員の成長

観光教育を核にした地域連携をめざしてカリキュラムの改編や授業づくりをすることで、個々の実践が教科や系列を越えてつながりを持つようになった。地域のさまざまな分野の人や行政、関係団体等との協議や折衝の機会も増し、アクティブ・ラーニング的な学習活動やカリキュラム・マネジメントを意識した教育活動につながる教員自身の成長が見られる。

### 【課題】理念の共有、人材育成、組織としての取組体制の確立

観光教育は歴史が比較的新しく、学習指導要領等でも今後重要視されていく分野であるとは言えるものの、認知度はまだ低い。本校でもこの数年試行錯誤しながら実践を積み重ねてきたが、現時点では取組は進みつつも、理念が十分組織内に浸透しているとは言えない。今後、さらなる学校活性化を進めていくためには、本校が立地している地域の基幹産業である「観光」とのつながりは不可避である。そのような理念を学校全体で共有し、意識する必要がある。

また、県立学校には人事異動があるため、現在中心となっている教員が異動しても学校の教育活動として継続していくための、人材育成も急務である。これまでの実践やノウハウを、水平展開して個人としてではなく組織として継続して取り組むことができるしくみを確立しなければならない。

これらの課題を念頭に、今後も職員力を合わせ、生徒も教員も地域も輝く実践を行いたい。

